

わたしの芸能三番口説(くどうち)

呉屋 淳子
民博 機関研究員

一番、芸能は「聞く」べし
わたしが生まれ育った沖縄本島中部は、エイサーや獅子舞が盛んな地域である。カレンダーなど確認しなくとも、夏の汗ばむ夜に鳴り響く三線や太鼓、笛の音が、旧暦七月の旧盆の訪れを知らせてくれる。

旧盆前に掲載された地元新聞の投稿記事を読んでいると「今年の旧盆は、どこのエイサーを見にいこうか、胸が弾む」という一文が目に入ってきた。わたしはその瞬間、調査地である石垣島の白保で出会ったある青年が「地元以外の芸能を見に行く余裕なんてない。自分たちのところだけでも大変なのに」と話していたことを憶い出した。

わたしのワールドワーク中の滞在先は、石垣島のちょうど東海岸に位置する白保という珊瑚礁が広がる海に面した村だった。白保は、石垣島のなかでも芸達者の多い村として有名な地域であり、「芸能の宝庫」とよばれている。芸能教育について調査するために石垣島を訪れたわたしにとって、白保の人たちの雑談はすべてが興味深く、聞き入る話ばかり

だった。とりわけ、興味深かったのは、若い唄者が唄う八重山民謡を聴きながら、異なる年齢層に属する者がひとつの場所で交流していることだった。若者たちは年長者の芸能に關するうんちくに耳を傾ける。そして、年長者は唄う若者たちを褒めたり、檄を飛ばすなどして、芸能の教授をおこなっていた。

二番、旗は、「連帯」でもつべし

わたしは、研究調査のよき相談役だったTさんから「白保の芸能をよく見なさい」とアドバイスをされた。そのときはちょうど豊年祭が近づいていた。わたしは祭りの準備を手伝う傍ら、児童から青年までが参加するという「旗頭奉納」の練習を見学しようと、夕方は学校のグラウンドへ、夜は公民館へと、白保の芸能の魅力に引き込まれるように毎晩のように出かけていった。

旗頭奉納とは、御嶽の前でその年の豊年を神に感謝し、来夏世の豊作を願う奉納儀礼のことである。八重山諸島の旗頭には、「トゥール」と「スマヤ」とよばれる二本の旗頭がある。二〇一一年の旗頭奉納も、御嶽の前に集まった神事を司る神司や公民館役員、そして村の人びとが注目するなかで執りおこなわれた。わたしが白保の旗頭を見るのは、これが三度目である。初めは青年たちの勇ましさに圧倒され、二度目は練習過程から観察し、儀礼の順序を把握するのに必死だった。三度目は、人に混じって雑談を楽しみ、ぎこちなさはあるものの合いの手を入れられるようになった。

白保では、旗頭のもち手としての決まり、あるいは禁忌がある。

白保の伝統的な旗頭の挙げ方は、もち手が一人でもち上げて降ろすという方法である。旗頭は、それぞれ五〇キロ近い重さで、長さは七メートルから八メートルあり、力と技術がないともち上げることができない。もち手は、幅約四〇センチ、長さ五メートルの白い晒を腰に巻き、旗頭を腹と両腕で支えてもち上げる。その際、責任者の技量、そして旗頭を支えるティージナ(手綱)との呼吸が揃わなければ、大きな事故を引き起こしてしまう。旗頭をもち上げて降ろすあいだは、全神経を集中させ、みんなが一心同体でなければならぬ。旗頭保存会の青年たちは皆、「旗頭は絶対に倒してはならない」と言う。そして、旗頭は、どんなに体格が立派であっても、青年たちの連帯があつてこそ為せる技なのだ、力強く語った。



「トゥール」と「スマヤ」とよばれるそれぞれ2本の旗頭



旗頭は「村のエリート」しかもてないと、白保の年長者は語る

の継承過程において非常に重要な役割を担っているのだ。また、鑑賞者は、定期的に祭りに足を運び、芸能を単に見るだけでは、その役割を充分に果たせるとは限らない。鑑賞者も実践者と同じように、多様な年齢層に属する人びとの交流を通して、知識としての芸能を身につけてこそ、「芸能を見る」ことができるようになるからだ。白保の旗頭を支える鑑賞者も、こうした関係のなかで育ち、ひいては、それが地域の伝統芸能を継承することに繋がっている。

芸能は、芸能の実践者と鑑賞者の両者が揃って初めて成立する。そして、実践者と鑑賞者の呼応のあいだで価値が共有され、継承に繋がっている。とりわけ、鑑賞者の合いの手が芸能の実践者への激励となり、ときにはその芸能の熟達度を試す機会にもなる。つまり、こうした鑑賞者による合いの手は、芸能

わたしは、ワールドで出会った人びとから芸能を「見る」ことの大切さを教わり、わたし自身も鑑賞者という立場から地元の芸能を「見る」ことで、伝統芸能を支える一員になるのだということを改めて気づかされたのである。



「責任者」を中心に旗頭の青年らが杵を作成している